

保育を学ぶ学生の幼児理解

—発達観の特徴から—

京林 由季子（岡山県立大学保健福祉学部）

要旨： 本研究では、保育を学ぶ学生の幼児理解について、発達観に着目しその特徴を明らかにすることを目的に、保育を学ぶ学生 75 名を対象に 30 項目からなる「発達観チェックリスト」を実施した。その結果、発達の階層的な理解については、全体の正答率は 40.2%であったが、運動機能、手指操作機能の発達の把握は言語認識機能に比べ不十分な状況であることが示された。発達の機能連関性の意識については、手指操作機能と言語認識機能のつながりが比較的持ちやすい状況が推察されたが、3つの発達機能の意識に相関は認められずそれぞれ別個のものとして理解している傾向が示された。学生が幼児の発達を階層的に、また、発達諸機能をつながりのあるものとして理解していく上で課題があることが示唆された。

キーワード： 保育学生 幼児理解 発達観

1. はじめに

幼児教育・保育において幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うことは重要であり、保育者が指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることが求められている（文部科学省，2018）。

保育実践において幼児の発達する姿を捉え、保育を改善していけるようになるために、保育を学ぶ学生は、幼児の成長や発達について様々な授業科目を通して誕生から児童期に至るまでの発達を学んでいる。しかし田中（2016）は、「一人一人の子どもを全人的に把握するためには、発達の諸機能の連関性、発達の段階間移行を詳しく理解するために必要な発達機制、発達機能と自己（自我）の関係性などの知識の獲得」が求められると指摘し、保育学生における幼児の発達の理解の実態を発達の階

層および諸機能連関性に着目し検討している。

発達の機能連関性は、脳神経学や障害児心理学の研究で散見されるものの（別府，2014）、発達心理学の研究が細分化される現在はあまり見られなくなっている用語である。しかし亀谷（2016）は、ワロンの機能連関と人格発達理論の検討から、諸機能を階層的・重層的かつ多元的に把握することで機能連関的な視点を追究し、それにより乳幼児の人格全体の発達を構想することができていることを示し、乳幼児保育の実践の一指針になるとと思われることを指摘している。

そこで本研究では、保育を学ぶ学生の幼児理解について、発達観に着目し、その特徴を発達の階層的な理解および発達の機能連関性の面から明らかにし、保育実践に求められる発達観の形成に向けての課題について検討する。

2. 研究方法

(1) 調査対象

A 県の4年制大学の幼稚園教諭養成課程・保育士養成課程で保育を学ぶ大学2年生75名を調査対象とした。

(2) 調査内容

田中(2016)を参考にし、調査項目については新たに作成した。本研究では、調査項目の選定にあたって標準化された発達検査である「KIDS 乳幼児発達スケール」(1989)のタイプTを用いた。タイプTより運動機能、手指操作機能、言語認識機能の3つの発達機能に該当する項目を10項目ずつ、かつ、4つの発達時期(1歳半頃)(2歳半～3歳頃)(4歳頃)(5歳頃)に各発達機能2項目ずつ、(1歳以前)と(6歳以降)に1項目ずつとなるよう計30項目を選択しランダムに配列した(表1)。分析対象とする項目は4つの発達時期(1歳半頃)(2歳半～3歳頃)(4歳頃)(5歳頃)に該当する24項目とし、(1歳以前)と(6歳以降)に該当する6項目はdistracterとした。

(3) 調査手続き

保育に関する授業のなかで、学生に対して「発達観チェックリスト」を配布し回答を求めた。教示は、「表に示された子どもの日常的行動について、(1歳半頃)(2歳半～3歳頃)(4歳頃)(5歳頃)に獲得されると思う項目の番号を該当欄に記入しなさい」とした。

学生全員が回答した後に「発達観確認シート」を配布し、運動機能、手指操作機能、言語認識機能の3つの発達機能別および

表1 幼児の日常的行動の項目

①	一人で縄跳びができる
②	公園などで知らない人にいたずらを注意されたらすぐにやめる
③	ぐるぐる書きができる
④	「ちょうだい」と言うと手に持っている物をくれる
⑤	片足で3秒くらい立っている
⑥	「遠い、近い」が分かる
⑦	脱いだ後、服をたためる
⑧	ボールを3回くらいドリブルできる
⑨	しりとり遊びができる
⑩	20ピースのジグソーパズルができる
⑪	ブランコに立ち乗りができる
⑫	ハサミを使って紙を切る
⑬	絵本を見せ「ワンワンどれ」と聞くと、指さす
⑭	ボールをオーバーハンドで投げられる
⑮	おもちゃの自動車などを手で走らせて遊び
⑯	公園にあるすべり台に登って、すべり降りられる
⑰	「新聞を持ってきて」など簡単な指示に従う
⑱	三輪車がこげる
⑲	つま先立ちで後ろに歩くことができる
⑳	目と耳は両方ともどんな働きをするかを知っている
㉑	クレヨンと絵の具を使い分ける
㉒	前かがみができる
㉓	自動販売機などのボタンを押したがる
㉔	まなて円がかける
㉕	ままごと遊びで何かの役を演じる
㉖	人などを描く
㉗	子ども達だけでリレー遊びができる
㉘	じゃんけんで順番を決める
㉙	折り紙で鶴が折れる
㉚	時計の時刻が分かる(デジタル表示を除く)

全体の①正答数および誤答数、②誤答分析、③発達の機能連関性について、学生が各自の回答を整理し、自身の発達観を確認できるようにした。

(4) 調査時期

2017年度～2020年度の各1月に実施した。この時期は調査対象者が養成課程の2年次末にあたり、幼児の成長・発達に関する知識と理論について「教育心理学」「子どもの心理学」「保育内容総論」「保育内容の指導法」「幼児理解の理論と方法」などの基礎的科目の学修が終了する時期になる。

(5) 倫理的配慮

調査対象者には調査の趣旨を説明し、調

査結果は研究以外に使用しないこと、及び、個人の評価に関係しないことを説明し回答を依頼した。

3. 結果

(1) 正答率

分析対象項目 24 項目(運動機能 8 項目、手指操作機能 8 項目、言語認識機能 8 項目)の正答率を表 1 に示す。平均正答率は、高い順に言語認識機能 46.6%、手指操作機能 39.7%、運動機能 37.2%であり、全体の平均正答率は 40.2%であった。分散分析により比較したところ有意差が認められ($F(2, 222)=5.188, p<.05$)、多重比較により、運動機能と言語認識機能に 5%水準で有意差が確認された。

表 2 平均正答率

	平均正答率 (%)	SD
運動機能	37.2	18.8
手指操作機能	39.7	17.5
言語認識機能	46.6	19.1
全体	40.2	11.4

(2) 誤答分析

誤答の分析として、誤答を過大評価によるものと、過小評価によるものの 2 つに区分しその割合を求めた。例えば、5 歳頃に獲得される行動「子ども達だけでリレー遊びができる」という行動を、2 歳半～3 歳頃の行動であると回答した場合に過大評価による回答と分類した。逆に、2 歳半～3 歳頃に獲得される行動「ハサミを使って紙を切る」という行動を、4 歳頃の行動であると回答した場合に過小評価による回答と

分類した。

誤答分析の結果(図 1)、全体では、過大評価による誤答 37.7%に対し、過小評価による誤答が 62.3%と過小評価の割合が有意に高かった($\chi^2(1) = 66.016, p<.01$)。

発達機能別では、運動機能と手指操作機能について、過大評価による誤答がそれぞれ 31.5%、29.9%に対し、過小評価による誤答がそれぞれ 68.5%、70.1%と過小評価の割合が高かった。言語認識機能では、過大評価 53.8%、過小評価 46.2%と両者に差異は見られなかった。運動機能、手指操作機能、言語認識機能の 3 つの発達機能の過大評価、過小評価における比率について検討したところ有意差が認められ($\chi^2(2) = 32.386, p<.01$)、残差分析の結果、5%水準で運動機能と手指操作機能は言語認識機能に比べて過小評価の割合が有意に高く、言語認識機能は過大評価の割合が有意に高いことが確認された。

(3) 発達の機能連関性の意識

運動機能、手指操作機能、言語認識機能の各発達機能の連関性に関する意識について検討するため、3 つの発達機能間の相関係数を算出した。運動機能と手指操作機能($r=.098$)、運動機能と言語認知機能($r=-.212$)、手指機能と言語認知機能($r=.032$)のすべての発達機能間に有意な相関は認められず、各機能は独立した位置にあった。

回答の傾向を探るため、3 つの発達機能の正答数の特徴から高レベル、中間レベル、低レベルの 3 タイプに分類し分析した。

<運動機能－手指操作機能>の機能連関性について、運動機能の正答数 6 以上、

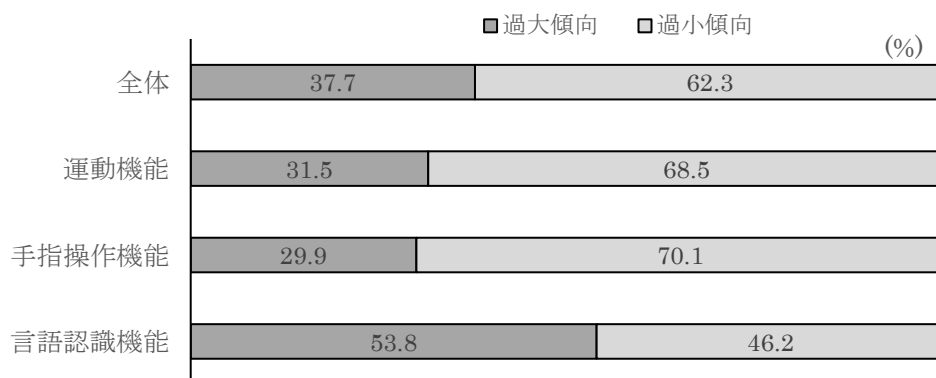


図1 誤答分析

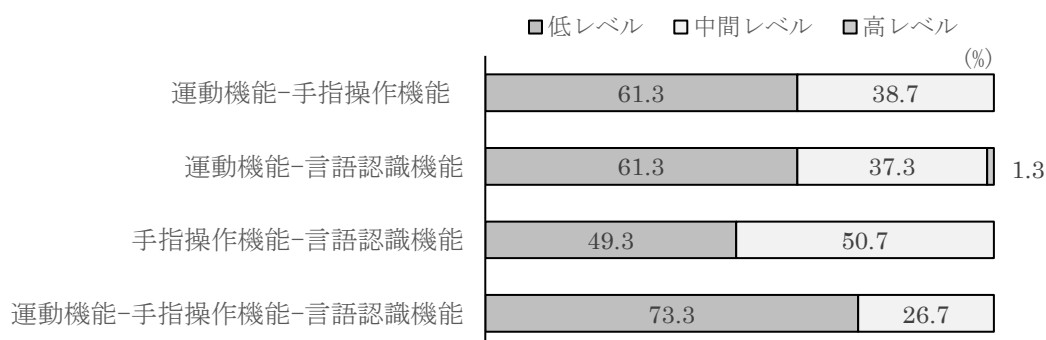


図2 発達機能連関性の意識

かつ、手指機能の正答数 6 以上を高レベルに、運動機能の正答数 2 以下、および、運動機能の正答数 3 以上のうち手指操作機能の正答数 2 以下を低レベルに、それ以外を中間レベルとして分類した。＜運動機能－言語認識機能＞＜手指操作機能－言語認識機能＞の機能連関性についても同様に分類した。

＜運動機能－手指操作機能－言語認知機能＞の機能連関性については、3 機能の正答数がすべて 6 以上の場合を高レベルに、3 機能のいずれかの正答数が 2 以下の場合を低レベルに、3 機能の正答数がすべて 3 以上、かつ、すべてが 6 以上でない場合を中間レ

ベルに分類した。

図 2 に示す通り、＜運動機能－手指操作機能＞＜運動機能－言語認識機能＞では、低レベル (61.3%) の割合が高く、＜手指操作機能－言語認識機能＞では、低レベル (49.3%) と中間レベル (50.7%) がほぼ同じ割合であった。＜運動機能－手指操作機能－言語認識機能＞の 3 つの発達機能の連関性では、73.3% が低レベルとなっていた。

4. 考察

(1) 発達の階層的な理解について

全体の正答率および各機能の平均正答率はいずれも 50% に達しておらず、学生にと

って幼児の発達を階層的に把握することが難しく、特に、運動機能(37.2%)、手指操作機能(39.7%)の発達の把握は言語認識機能(46.6%)に比べ不十分な状況にあることが示された。また、誤答分析では運動機能と手指操作機能について過小評価による誤答の割合(各々68.5%、70.1%)が高く、発達の把握の不十分さから実際に獲得される年齢よりも上の年齢でないとできないと考える学生が多く、過小評価による誤答が多くなっていると考えられる。

調査項目が異なるものの、田中(2016)と同様に本研究においても、言語認識機能は運動機能、手指操作機能よりも正答率が高く、学生にとって比較的理解しやすい機能と言えるのに対し、運動機能、手指操作機能について発達の把握の不十分さや過小評価に特徴がある点は同様であった。運動機能や手指操作機能の発達の把握の難しさは、学生が日常生活の中で幼児の生活や遊びを観察する機会が少ないこともあるが、学生自身の生活経験も影響していることが考えられる。つまり、学生自身が木登りをする、お手玉をする、こよりを作る、などの全身を使う遊びや手先を使う遊びの体験が乏しかったり、重視されてこなかったりしたために、幼児の身体の動かし方や手先の使い方に関心を持ち観察する意識が希薄になっていると考えられる。

(2) 発達の機能連関性の意識について

学生の発達の機能連関性の意識については、運動機能、手指操作機能、言語認識機能の間に相関は認められず、それぞれの発達機能をつながりのあるものとして捉えていないことが分かった。

学生の3つの発達機能の正答数の回答の傾向からは、手指操作機能と言語認識機能とのつながりが比較的持ちやすく、運動機能と手指操作機能および言語認識機能とのつながりは持ちにくい状況が推察された。さらに3つの発達機能のつながりへの意識については、7割以上の学生が低いレベルであった。

学生は、おままごとや描画場面などでは、幼児の言葉のイメージと手指の操作のつながりを比較的把握しやすいと言える。一方、運動機能と言語認識機能のつながりの持ちにくさについて田中(2016)は、砂場での跳躍運動を例に「思いつき跳ぶ」「半分だけ跳ぶ」など、全身を使った運動にも言語認識的調整力が密接に影響を及ぼしていることを示し、学生の機能連関に対する理解の低下を指摘している。幼児の発達において諸機能はつながっていること、一つの遊びの中にも諸機能のつながりが表れていることへの気付きをもつ必要がある。

5. おわりに

「幼児理解に基づいた評価」((文部科学省, 2019)において、一般的な発達について知ることは、その将来像を見通した指導に生かされるのであれば有意義なことであると示されている。幼児の発達について表面に見える姿や行動の一部分だけに注目すると、一般的な発達の知識は「できる」「できない」の判別で終わり大きな弊害をもたらす可能性がある。保育者として、まとまりをもちつつ発達する存在として幼児を理解し、かつ、分析的に関わることができるようになるためには、幼児の主要な発達の機能や機能間のつながりに気付き、正しく把握

できるようになることが大切であろう。

今後は、発達観の学年による比較や保育者との比較により、保育実践に求められる発達観の形成に向けた学習内容について検討することが必要と考えられる。

参考文献

- 1) 別府哲 (2014) 自閉症スペクトラムの機能連関, 発達連関による理解と支援—他者の心の理解に焦点をあてて—, 障害者問題研究 42(2) : 91-99,
- 2) 亀谷和史 (2016) アンリ・ワロンの人格発達理論における「機能連関」と「指向性機能」に関する一考察、日本福祉大学子ども発達学論集 8 : 25-34.
- 3) 黒田吉孝 (2014) 自閉症スペクトラム研究と特性理解、障害者問題研究 42 (2) : 2-10.
- 4) 三宅和夫監修 (1989) KIDS 乳幼児発達スケール、発達科学研究教育センター.
- 5) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説、フレーベル館.
- 6) 文部科学省 (2019) 幼児理解に基づいた評価、チャイルド本社.
- 7) 田中道治 (2016) 保育士を志望する学生の発達観、鈴峯女子短期大学人文社会科学集報 63 : 69-78.

A Study on Children's Understanding of Childcare Students: Characteristics of Developmental Perspective

YUKIKO KYOUBAYASHI

Faculty of Health and welfare Science, Okayama Prefectural University

Abstract : The purpose of this study was to clarify the characteristics of childcare students' understanding of children, focusing on their views on development. A “development view checklist” consisting of 30 items was implemented for 75 childcare students. The overall average correct answer rate for understanding developmental stages was 40.2%. It was shown that the developmental grasp of motor function and finger operation function was insufficient compared with the language recognition function. No correlation was observed between the three developmental functions. It is suggested that there are many issues regarding the understanding of developmental stages and the linkage of developmental functions in order for childcare students to deepen their understanding of child development.

Keywords : childcare students, preschool children's understanding, view of development